坂井さんの論文に寄せて

小田中　章浩

坂井晶子さんは、平成21年に表現文化学専修の博士前期（修士）課程に入学して以来、マテリアルとしての本と文学作品との関係という、表現文化学にふさわしいテーマの下で研究を続けてきた。より具体的には本の装幀や活字のデザインといった物質的な側面が、作品の受容や生成にどのような影響をもたらすのかという問題である。

そのため修士課程一年時には、西洋のタイポグラフィの歴史から始まり、日本における活版印刷の受容に関する基礎的な研究を行った。修士課程二年時に入ると、問題をより具体化させ、活版印刷、特に西洋の印刷で用いられる各種の記号が、当時の日本文学の近代化にどのような影響をもたらしたかに注目した。その結果として完成したのが修士論文「文学と記号表現―明治二十年代における記号の使い方について―」である。もっともこのように書くと、坂井さんの研究は順調に進展してきたように見えるかもしれない。しかし実際には、ある時点に至るまで試行錯誤の連続であった。ただ、以下に示したような、論文の中心となる問題を発見してからは、坂井さんの成長ぶりは著しかった。

論文では、言文一致体の成立において、句読点のような文章記号が果たした機能を実証的に検討している。研究の背後にあるのは、言文一致体の成立とは、従来言われているような口語と文語の融合という単純な問題ではなく、句読点のような西洋由来の文章記号によって文章を切断し、あるいはいかに接続するかという作者の意識の方が重要だったのではないかという視点である。確かに西洋の近代小説では、映画のショットが次々と切り替わるように作者の視点は自由に移動していくが、そのためには作者がいわば神の視点に立ち、作品の背後に身を隠す必要があった。当時の日本文学に即して言えば、話者＝作者の一人称による戯作調の語りの技法を、三人称による一見客観的な描写に転換させていくことが必要だったのである。

修士論文ではこの問題を明らかにするために、作品のテキストに即した実証性に加えて、西洋ならびに日本における句読法の歴史から、G・ジュネットによる話法の分析という現代の文学理論に至るまで、幅広い視点から問題を考察している。今回の論文は、修士論文の内容の一部を紹介したものだが、坂井さんの視点のユニークさと、分析の緻密さの一端を味わってもらえれば幸いである。